

「京に着ける夕」の光景：『夜の京阪』を参照項として

高槻, 侑吾
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2344802>

出版情報：九大日文. 33, pp.2-24, 2019-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



「京に着ける夕」の光景

——『夜の京阪』を参照項として——

TAKAHARA
高槻 侑吾

はじめに

明治四十年三月に東京朝日新聞社に入社した漱石は^①五月に「入社の際」^②と「文芸の哲学的基礎」^③を発表して「文芸に關する所信の概要を述べ」るとともに、自身の「立脚地と抱負とを明かに」した。そして、六月には「虞美人草」^④の連載を開始し、新聞小説家としてデビューした。一般的に、漱石の新聞小説家デビュー作は東西両方の『朝日新聞』に掲載された「虞美人草」とされているが、実際には「虞美人草」に先立って『大阪朝日新聞』に掲載された作品がある。「京に着ける夕」と題されたそれは、東京朝日新聞社への入社を決めた漱石が、明治四十年三月末から四月上旬まで京都に滞在した際に執筆した「小品」で、同年四月九日から十一日まで、上・中・下の三回に分けて『大阪朝日新聞』の第一面に掲載された^⑤。

明治四十年四月九日は『大阪朝日新聞』発刊九千号の記念日で、「京に着ける夕」はこれに合わせて執筆されたことが漱石の書簡（明治四十年四月七日付、大阪朝日新聞社京都支局宛）からうかがえる。

別封は来る九日御社発刊に掲載すべき原稿に有之候鳥居君に御約束致し候処少々時日後れ至急を要し候につき御手数ながら此旨本社へ電話にて御通知の上使にて同君手元迄御届被下度願上候先は用事迄

「原稿」が大阪朝日新聞社主筆鳥居素川との「約束」だったとすれば、漱石は「京に着ける夕」が九千号の紙面に掲載されることを踏まえて執筆したのであるうし、同時代の読者にとっても、新聞紙面で「九千号記念」の告知とともに入社を紹介された漱石への期待は高かったと思われる（20頁「図一」参照）。

では、漱石は「京に着ける夕」で何を描き、それを『大阪朝日新聞』の読者はどのように受容したのか。このことを明らかにするためには、「京に着ける夕」の描写を同時代の言説や状況と照らし合わせて検討する必要がある。

「京に着ける夕」では一編を通して京都の〈夜〉が描かれている。「余」（漱石）は京都の夜を「淋しい」「寒い」と語り、「人氣のない」「暗い軒下」にぶら下がる「赤いぜんざいの大提灯」が登場する。こうした京都の夜の語り方ないし風景について、同時代の言説や状況と照らし合わせた先行研究は少なく、以下に掲げる平岡、佐藤両氏の論考を数えるのみである^⑥。

平岡敏夫氏は、『明治四十三年京都——ある画家の若妻の日記』（新曜社、一九八二年四月）を「漱石作品に接近するための比喩的な一次資料として引用」し、そこに描かれている五条の薬屋中野家の暮らしぶりと「京に着ける夕」の描写を比較して、

次のように述べている⁹⁾。

年によつて変化はあるだろうが、同じ三月二十八日もこんなにながうものかと思う。むろん比喩的引用なのだが、「何だか昨日からむし〜とあおつたかとおもへば」雨降りになったというのである。真下飛泉が中野家の学区の修道小学校校長として着任、その歓迎会が「播清」で「暮早く」開かれたとあるが、「京に着ける夕」で漱石が七条（京都）停車場に到着したのは午後七時三十七分であり（注解・清水孝純、中野家の主人（忠三郎・七世忠八）が「播清」に出かけたのは午後七時前である。午後十時過ぎに帰宅したが、その時不意の来客があつて接待したとある。同じ時期の京における夕べ、日暮れであるにしては、たいへんな相違である。淋しき、寒さが多分に漱石の心象にもとづくもので、「京につける夕」は一個の文学作品として、今は「骨が腐りつゝある」子規と共に徘徊した（京都）の印象を描きとめたものと言えよう。

日記の記述によれば¹⁰⁾、確かに漱石と中野家の人々の活動には大きな差があるが、五条という場所や葉屋という職業を考えれば、東京から旅行で訪れ、下鴨・糺の森に投宿した漱石と状況が異なるのは当然であろう。さらに、次章でも述べるが、明治四十三年という時期は京都市内の電灯普及率が急上昇し、京都の近代化が加速していく突端の時期でもあつた。そのため、

「京に着ける夕」で描かれている京都の夜の「淋しき、寒き、暗さ」が、「多分に漱石の心象にもとづくもの」か否かは、明治四十年前後の、しかも家庭ではなく街の風景に照らして検討する必要がある。

佐藤良太氏は、「京に着ける夕」を一つの文学作品と捉え、その「創作」的側面に着目した。氏は、「余」を振り落とした汽車が向かう「暗い国」¹¹⁾（近代）に對置されるものとして、「余」を乗せた人力車が向かう「遅かなる国」¹²⁾（近代以前）を指定する。そして、この（近代以前）という空間を創出するために、京都を「寒い所」とし、近代化する風景を捨象して「昔の儘」変わらない「淋しい」風景を描くという、意識的な「強調」ないし「改変」が行われたと指摘している¹³⁾。もちろん、「京に着ける夕」に創作的側面があることは否定しないが、佐藤氏が言うところの「強調」や「改変」は、当時の気象状況や明治期以降の京都における近代化事業との比較によつて浮かびあがつたものであり、同時代の京都の夜を語る言説には注目していいない。

そこで本稿では、「京に着ける夕」の「淋しき」と「寒き」、そして両氏とも触れていない「ぜんざい」の描写が、どこまで同時代の風景を反映しているのか、『夜の京阪』（『芸芸界』定期増刊第十六号、明治三十六年五月）に見られる言説を中心にテクスト・レビューで比較することを通して明らかにする。そのうえで、同時代の読者による受容についても検討を加える。なお、『夜の京阪』を比較対象とするねらいについては次章で言及する。

一、「京に着ける夕」と『夜の京阪』

考察を始めるにあたり、「京に着ける夕」の成立過程と『夜の京阪』の書誌を整理したうえで、両者を比較するねらいについて述べる。

明治四十年三月二十八日、漱石は午前八時新橋発の最急行で京都へ向かった。明治二十五年七月に正岡子規と初めて訪れて以来、十五年ぶりの京都だった。出発前の漱石の書簡（明治四十年三月二十三日付、野上豊二郎宛）には次のように記されている。

京へは参り候。（中略）京都には狩野といふ友人有之候。あれは学長なれども学長や教授や博士杯よりも種類の違ふたエライ人に候。あの人に逢ふために候。わざ／＼京へ参り候。（中略）大坂へも参りて新聞社の人々と近付になる積りに候。

旅の目的は友人の狩野亨吉（京都帝国大学文科大学長）に会うこと。さらに足を延ばして、大阪朝日新聞社の関係者と親睦を深めることだった。午後七時三十七分に七条（京都）に到着した漱石は、狩野と菅虎雄の出迎えを受け、人力車で狩野宅がある下鴨・糺の森へ向かった。このときの体験・出来事を下敷きにしたのが「京に着ける夕」である。当日の漱石の日記には、

○夜七条ニツク車デ下加茂ニ行ク。京都ノ first impression

寒い

○湯ニ飛び込ム

○糺ノ森ノ中ニ宿ス。

春寒く社頭に鶴ヲ夢ミケリ

○暁ニ鳥ガ鳴ク。への字ニ鳴きくの字ニ鳴く

○夜中に時計ガチンと鳴る。

とあり、作品の材源とも言える記述が見られる。とりわけ「寒さ」については書簡（明治四十年三月三十一日付、小宮豊隆宛）でも言及されており、「京都は寒く候加茂の社は猶寒く候糺の森のなかに寐る人は夢迄寒く候」と繰り返されている。また、創作メモと思われる「断片」（四〇A）には、「×京都へ落ちる。糺の森の夜。鳥。時計。雨。正岡子規」とあり、亡友子規の名前も出ている。日記、書簡、断片のいずれにも「ぜんざい」の記述は見当たらないが、「正岡子規」の裏側には「赤いぜんざいの大提灯」が想起されていたのではなからうか。

このあと漱石は四月十一日まで京都に滞在し、途中、四月四日に大阪朝日新聞本社で社主村山龍平と面会し、大阪市内のホテルで社員らと会食した。鳥居素川の回想に、「自分の勧めに依り、君は大坂に来て社長に面会せられた。『京に着ける夕』といふ瑰麗の奇文が君の名を以て我紙に現はれたのは、君が社長に面会せられた後、僅かの日であつた」⁽¹⁰⁾とあることから、このときに「原稿」の執筆依頼があつたと思われる。翌五日に京都へ戻つた漱石は、六日に原稿を執筆し（推定）、七日には大

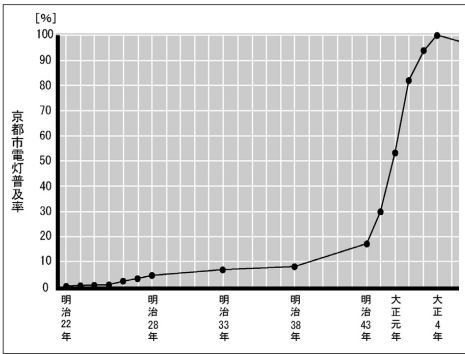
阪朝日新聞社京都支局へ送付している。こうして鳥居のもとに届けられた「京に着ける夕」は、四月九日の発刊九千号の記念日に、『大阪朝日新聞』の読者の目に触れるところとなった。

一方、『夜の京阪』は雑誌『文芸界』の定期増刊第十六号として、明治三十六年五月に刊行された（佐々政一編）。背表紙に「博覧会紀念」、「序文」に「今年浪花津や百舟競ふ大都会に、夜も昼なる大博覧会のをりを得て、京大阪の夜をこそ、未だ見ぬ人も見給ひね、見給ふ人のしるべもせん」とあることから、同年三月から七月にかけて大阪で開催された、第五回内国勸業博覧会に合わせていることが分かる。浅井忠による表紙（「大阪城遠景と京都四条夕涼」と口絵（京都の美人）をはじめ、豊富な挿絵、巻頭に掲載された四条大橋、新京極、円山の夜桜、天神橋、中之芝居、北ノ新地、博覧会会場の夜景写真、各種広告など、視覚的な要素にあふれている。自身は「夜の京都」と「夜の大阪」からなる二部構成で、夜にまつわる名所や風物が小説家を中心とした執筆陣によつて紹介されている。また、「大阪及堺」「京都及伏見」の地図も付されており、観光案内の要素が強い。以下に「京都の夜」の目次（題目と執筆者）を掲げる。

- 夜の大文字（島華水）／京都の夜桜（中川霞城）／京都の花街（金子静枝）／夜の東山（中山白峰）／嵯峨野の虫（井手蕉雨）／祇園団子と加茂川千鳥（小川煙村）／京都の飲食店（愛通子）／夜の高瀬川（大森痴雪）／祇園会宵山（村上文芽）／京の雪の夜（歌川国松）／稻荷の夜山と県祭（村上文芽）／四条碩夕納

- 涼（真下飛泉）／点灯後の新京極（高橋愛川）／京都の旅宿（鈴木露村）／本山まゐりの夜（鶴崎一畝）／除夜の祇園（齋藤紫軒）／夜の市街（中山白峰）／夜の西陣（中川柳漣）／寂しき夜の市街（稲岡蓼花）／月下の島原（煙村閑人）／糺の森の夏夜（齋藤紫軒）／京都の料理店（久保田米徳）

このうち、本稿では「本山まゐりの夜」「寂しき夜の市街」「京都の飲食店」を中心にとりあげる。『夜の京阪』と「京に着ける夕」には四年の時間的懸隔があるため、この間に夜の風景が一変した可能性も考えられるが、電灯普及率の点から見ると、



【図2】京都市電灯普及率の変遷⁽¹⁾

その可能性は低いと思われる。

田中尚人氏らによれば、明治二十二年に京都電灯が開業してから明治三十八年までの十六年間で電灯普及率は8.4%で、一割にも満たなかったという。その後、明治四十三年から急上昇し、三年間で五倍近くになっ

ている(5頁【図2】参照)、『夜の京阪』が刊行された明治三十六年の普及率が約8%であるのに対し、「京に着ける夕」が発表された明治四十年の普及率は約11%で、三十六年と比べて微増にとどまっている。『夜の京阪』の「見し世の夜」(佐々醒雪)には、「四条京極に夜を更せば、吉田といふ遥なる片田舎とのみ聞きなれて、かしこの車夫も乗せんとはせざりき」とあり、新京極から直線距離で約三キロ北東に位置する吉田が、車夫も行きたくない「片田舎」と表現されている。

また、明治四十三年のはじめに「聖護院から東丸太町の仲小路の家に移った」という松田道雄氏は、「電灯はまだなかつた。二階の父の部屋の机には置きランプがあり、下の居間には天井から下がった吊りランプがあつた」と回想している⁵⁾。このことから、祇園や新京極などの主要箇所を除いて電灯はほとんど普及しておらず、中心部と周縁部の落差は大きかつたことが分かる。

このように、電灯普及率に即して見た場合、明治三十六年と四十年における京都の夜の風景には大差がないことから、『夜の京阪』は「京に着ける夕」の比較対象として一定程度有効だといえる。以上を踏まえて、次章より考察に入る。

二、「淋しき」と「寒き」

本章では、「京に着ける夕」の「淋しき」と「寒き」の描写が、どこまで同時代の風景を反映しているか検討する。

(1) 「淋しき」の淵源

「京に着ける夕」では、「余」を通して京都の夜の「淋しき」と「寒き」が繰り返して語られるが、この傾向は冒頭部分ですでに表れている。以下に一部を引用してみる。

唯さへ京は淋しい所である。原に真葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至つても十条に至つても、皆昔の儘である。数へて百条に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。此の淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から会釈なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が尽きて、家が尽きて、灯が尽きる北の果迄通らねばならぬ。

ここでは、京都が時間的にも空間的にも「昔の儘」変わらないうものとして語られている。これは次の引用に見られる、「太古の京」「静なる京の夜」といった表現にも通じる⁶⁾。『夜の京阪』の「寂しき夜の市街」(稲岡蓼花)でも、「微かに聞こゆる鴨川の水の音、北は鞍馬の山黒く、西に愛宕の峰高し、万都尽く眠れるが如く、その静けさは物に譬ふべくもあらず」のように、不変の自然とともに夜の静寂が描写されている。

「余」はこうした風景のなかに一種の「淋しき」を覚えていく。この「淋しき」とはどのようなものか。右の引用に続く箇

所を見つみる。

東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身体から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮込み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此の刺激の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛び下りた余は、恰も三伏の日に照り附けられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ様なものだ。余はしゆつと云ふ音と共に、倏忽とわれを去る熱気が、静なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「余」は、「淋しい」「寒い」「太古の京」に対し、東京を「烈しい」「刺激の強い」「熱気」ある空間と捉え、その落差を「三伏の日に照り附けられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ様なものだ」と表現している⁴⁾。ここから、「余」が感じている「淋しさ」は、「東京」との対比によつて強く意識されていることが分かる。同様の言説は『夜の京阪』にも見られる。「本山まゐりの夜」(鶴崎一畝)の一節を引用してみる。

一体片田舎の停車場は除外例として、少くも大都會の停車場の近辺は非常に賑はつて、殊に夜などは人車の絡駈、電灯の光、触目の景象すべて一箇の不夜城を現出するのが常である。然るに京都の停車場はこの観念を以て実景に対す

ると、実に意外の感に打たれざるを得ない、平日宵の中こそ前の人家に火が点つて居つて、電車の二三台もあれば、人車の往来も多少はあるが、これとて一体に東京、大阪、に比べると寂しい、況んや夜の九時十時にもなると段々さびれて停車場の電燈の光の外は殆ど闇の世界といつても宜いくらゐの光景で、(中略)大阪のやうな陽気な停車場を見た目で、京都の停車場に着くと、恰で舞樂洋々たる天堂を出て、俄に地獄の谷にでも入つたやうな気がすると、言つた人があつたが、実景に接するに及んで、その言の万更法外な嘘でもないことが合点せられるのである。

以前五、六年京都で暮らしていた鶴崎は、本山参りで「或年の一月二十日前後」の「夜の九時頃」に大阪方面から京都に来た。「京に着ける夕」の「余」と訪れた時期や状況は異なるが、外部から再び京都を訪れた点、京都を外部の都市と対比している点では一致している。鶴崎は京都で、「夜の九時十時にもなると段々さびれ」て、「停車場の電燈の光の外は殆ど闇の世界といつても宜いくらゐの光景」を目の当たりにする。そして、ある人から聞いた、「大阪のやうな陽気な停車場を見た目で、京都の停車場に着くと、恰で舞樂洋々たる天堂を出て、俄に地獄の谷にでも入つたやうな気がする」という言葉が、あながち嘘ではないと実感する。「京に着ける夕」の「三伏の日」と「緑の底に空を映さぬ暗い池」の比喩も、これと同じ意味合いを持つと考えてよからう。このあと詳しく見る「寂しき夜の市街」

でも語られているように、祇園や新京極などの中心部を除く京都の夜は「暗く淋しく、好くいはゞ太古の如く、悪くいはゞ地獄の一筋道を辿り行く」ような様相を呈していたのである。

「淋しさ」と「暗さ」の密接な連関は、京都に暮らす人々や、京都の夜に触れたことがある人々にとつては当たり前だが、鶴崎や「京に着ける夕」の「余」には、京都が外部であるがゆえに「暗さ」が東京や大阪の「明るさ」と対比され、「淋しさ」として感じ取られている。このように、京都の夜の淋しさは外部からのまなざしによつて「発見」されるのである。

ここで注意したいのは、ひとくちに「外部からのまなざし」とは言つても、鶴崎と「余」のそれは性質を異にしているということである。「余」の場合、京都を訪れたのは十五年ぶり二度目で、ほとんど初めてと言つていい。そうした「余」から注がれるのは「観光のまなざし」である。ジョン・アーリによれば、観光という「体験の一部は、日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけること」である⁴⁵⁾。実際、漱石の日記には、「祇園に行く。公園八俗地なり」（明治四十年三月二十九日）など、名所旧跡を巡つた際の所感が記されており、京都に対して「観光のまなざし」を投げかけていることが分かる。そのように考えると、「京に着ける夕」で語られている京都の夜の淋しさや寒さは、「東京」から来た「余」が創り出した「心象地理」である可能性が浮上してくる⁴⁶⁾。

対する鶴崎の場合は、五、六年京都に暮らした経験があるた

め、「観光のまなざし」ではない。それゆえ「本山まゐりの夜」は、「余」の言説が「東京」からまなざした心象地理に基づくものか否かを測るための参照項として用いることができる。別の言い方をすれば、佐藤氏が指摘している「強調」や「変変」を検証するための、一つの視座になり得るということである。このことは、次に見る「寂しき夜の市街」にも当てはまる。

『夜の京阪』では、京都の夜の華やかで明るい部分だけでなく、暗く淋しい部分にも光が当てられている。そうした京都の夜の「裏面」をよく描写しているのが「寂しき夜の市街」である。筆者の稲岡蓼花は東京で小説家として活動しているが、生まれ育つたのは京都であるため、鶴崎と同様、その言表行為は「観光のまなざし」に基づくものではないといえる。以下、具体的に見ていく。まずは冒頭部分を引用してみる。

あはれ京の夜を説かんほどのものは、先づ祇園島原先斗町、解語花の乱咲なる粹で高尚で奥床しき遊里の賑ひ、さては新京極の繁昌雑踏、春は公園の糸桜にぼんぼりの光床しげなる、夏は四条河原の夕涼み、秋なれば嵯峨の辺りの月の冴けき、冬は千鳥の鳴く音を聞きつゝ巨燧で玉子酒の味な木屋町三本木の風流など挙ぐるならんが、斯くては真の夜の京都を紹介するにはあらず、夜の京都は暗く淋しく、好くいはゞ太古の如く、悪くいはゞ地獄の一筋道を辿り行くが如し。

京都の夜を紹介しようとする、祇園や新京極、円山公園の夜桜や納涼床など、人が多く集まる場所に目が向きがちだが、それでは「真の夜の京都」を紹介したことになるかと稲岡は言う。これは裏を返せば、「寂しき夜の市街」で描かれている風景こそが、京都の夜の大部分であり、日常だということである。このあと稲岡は、語り手「予」を登場させて京都の夜の風景を描写していく。設定は、明治三十六年の「春のはじめ」、久々に東京から故郷の京都に帰ってきた「予」が、午後九時ごろ七条に到着し、人力車で寺町今出川まで向かうというものである。「京に着ける夕」では、明治四十年三月二十八日に、十五年ぶりに東京から京都にきた「余」が、午後七時三十七分に七条に到着し、人力車で下鴨・糺の森まで向かう様子が描かれていることを考えると、二つのテクストは語り手の性格や置かれている状況、時間・空間が極めて近いといえる。

以上を踏まえて、両者を比較してみる。まずは人力車から見える風景の描写である。

「遠いよ」と云つた人の車と、「遠いぜ」と云つた人の車と、顛へて居る余の車は長き轆を長く連ねて、狭く細い路を北へ北へと行く。静かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らしに行く。鳴る音は狭き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝん、と云ふ。石に逢へばかゝん、かゝらんと云ふ。陰気な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。／細い路を窮屈に両側から仕切る家は悉

く黒い。戸は残りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提灯が見える。赤くぜんざいと書いてある。人氣のない軒下にぜんざいは抑も何を待ちつゝ赤く染まつて居るのかしらん。
(「京に着ける夕」)

車夫は無言で駆出しぬ、車は何となく狭く、両輪の回転するに連れてチャラン／＼チャラン／＼と異しき騒がしき耳喧しき音のして、その不愉快いふばかりなし。／(中略)

町は細く暗く、何処の家も戸を閉てゝひそまり返りしさま、ステーション最寄の町とは夢にも思はれず、今は九時何十分とて、東京ならば銀座通の裏表今を真盛りの賑ひなるに、土地かはれば斯くまでも品かはるものか。／五条通は京都にて三条四条の両通りについての目貫の場所ながら、軒並の家は皆戸の閉ちられて、是より北へ麩屋町通へ曲らうといふ手前の、南側なる饅頭屋のみぞ淋しき釣洋燈を三つ四つ点して、小僧一人眠むたげなる顔して往來を見渡しぬ、その往來とても数ふるばかりにて、東京の山の手、而もずんと奥の場末の町のその如く。
(「寂しき夜の市街」)

「京に着ける夕」の「余」を乗せた人力車は、「かんからゝん」という「寒い響」を静寂の夜に鳴らして、「狭く細い路」をひたすら北上していく。道中に見えるのは、門戸が閉じられ、明かりが消えて静まり返つた人家や、「人氣のない軒下」にぶら下がる「ぜんざい」の赤提灯といった「淋しい」風景である。

「狭く細い路」がどこなのかは示されていないが、水川隆夫氏は、「漱石たちは七条停車場から烏丸通を北上して、今出川通りを東へ走り、「出町橋」の袂を左へ切れて、賀茂川にかけられた「葵橋」を渡って下鴨本通りを少し北へ進んだ」⁽¹⁷⁾とし、河野仁昭氏は、「漱石らは寺町通（南北に通じる通りでは、寺町通が当時のメイン・ストリートだった）から今出川通を東へ折れ、賀茂大橋の西袂から北へ折れ、出町橋を渡って下鴨神社の参道を北上しようだ」⁽¹⁸⁾と推測している。いずれのルートも考えられるが、寺町通は途中に新京極や電気鉄道の線路があるため、暗く淋しい風景にはなりにくい。その点では、夜になると人通りが少なくなる東本願寺や（本山まゐりの夜）、広大な緑に囲まれた御所がある烏丸通の方が、テクストの描写には近い⁽¹⁹⁾。ただし、南から北まで一貫して同じ通りを進んだとは限らないし、「京に着ける夕」では華やかで明るい風景が削り取られている可能性があるため、慎重に検討する必要がある。

一方、「寂しき夜の市街」の「予」を乗せた人力車は、電気鉄道の線路に沿って塩小路通から東洞院通へ曲がったあと、枳殻殿の西側を通って東へ曲がり、上枳殻馬場通から下寺町通を抜けて五条通に出た（中略部分）⁽²⁰⁾。車輪の「チャラン／＼チャラン／＼」という「異しき騒がしき耳喧しき音」とは対照的に、「町は細く暗く、何処の家も戸を閉て、ひそまり返」⁽²¹⁾っている。目抜きした五条通に出ても往来は少なく、物淋しい釣洋燈を三、四個点した饅頭屋が営業しているだけで、その様子は「東京の山の手、而もずんと奥の場末の町」のようである。

二つのテクストを比較すると、細く狭い通りに活動のない暗い人家が並び、そのなかに提灯ないし釣洋燈がともるといふ風景が類似している。

このあと「予」を乗せた人力車は、五条通から麩屋町通へ曲がり、丸太町方面へ向かってさらに北上していく。

万寿寺、松原、高辻、仏光寺、綾の小路、四条通は流石に電気の光など輝きて、両側の各商店も未だ寝ぬ火影道を照し、通行の人も可なりに、車の往来もあれど、錦小路、蛸薬師と進めば、矢張元の寂しさにて、街燈の光の心細げに、騒しげなる物音人声などいへるは葉にしたくもなく、五条通より此処まで来る間に余は只車二台に出合しのみ。『おい車夫さん、何時でも恁麼に淋しいのかね、馬鹿に陰気ぢやないか、なんだつて恁麼に淋しいんだ？』と予は車上より声掛けぬ、／『淋しいテ貴方、ソラ四条や京極のやうやおへんが、是なら当然です』車夫は走りながらに斯く答へて、六角、三条、姉小路、御池と次第に上（北へ行くを上へ行くといふ）へ進めば進むに従ひ、更に一段の寂寥を増しぬ、（中略）予は何とやら心細き氣のして、都恋しく、車夫のあがきの一足ごとに奈落の底に引き込まるゝかの心地したり。

（「寂しき夜の市街」）

途中、万寿寺通から四条通にかけて、「電気の光」などが輝き、多くの人や人力車が行きかう華やかで明るい風景が現れる

が、それを過ぎるとまた「元の寂しさ」に戻り、北へ行けば行くほど「更に一段の寂寥」が増していく。前章で見た京都市内の電灯普及率の低さを反映しているといえよう。淋しさに耐えかねた「予」が車夫に、「何時でも恁麼に淋しいのか」、「なんだつて恁麼に淋しいんだ」とたずねると、「四条や京極のやうやおへんが、是なら当然」だという。このやりとりからも、中心部を除いた京都の夜の暗く淋しい風景が、当地の人々にとつては日常の一コマであることが分かる⁶⁾。

もう一場面、比較してみる。今度は二人の語り手が目的地に到着した際の描写である。

かんからゝんは長い橋の袂を左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葦とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱か五抱もある大樹の幾本となく提灯の火にうつる鼻先で、びたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よく／＼寒い所へ来たのである。遥なる頭の上に見上げる空は、枝の為に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元来何処へ寝るのだらうと考へた。

(京に着ける夕)

又一台の電車、今度は一人の客をも乗せず空車にて、すさまじき音と共に西に走り去り、あとは又元の闇夜に返りて天の星のみ冴けし。／＼振返れば今来し方は闇に包まれ、一

際黒きは茂れる御所の樹木か、二つ三つの街灯のかすかに光を放てるなど、一々寂しさと心細さを感じて、京へはやう／＼今来しばかりながら、そゞろに東の空の懐かしくなりぬ。

(寂しき夜の市街)

二人が向かった先は、「四抱か五抱もある大樹」が群生する「加茂の森」と、樹木が生い茂る御所に近い寺町今出川である。いずれも、「町が尽きて、家が尽きて、灯が尽きる北の果」⁷⁾とも言える、淋しさと暗さを極めた場所である。それを象徴するように、「加茂の森」の空には「料峭たる星の影がきらりと光を放」ち、「闇に包まれ」た寺町今出川では「天の星のみ冴」かに見える。このように、二つのテキストは自然の風景描写でも類似している。

以上の比較から、「京に着ける夕」は同時代の京都の夜の風景を写し取っており、「余」の言表行為が「東京」からまなざした心象地理に基づくものではないといえる。そのように考えると、佐藤氏が指摘している「強調」や「改変」といつた捉え方で、「淋しさ」に関わる描写を括することはできないだろう。

(2) 「寒さ」の内実

ここまで「淋しさ」を中心に見てきたが、「寒さ」についてはどうであろうか。ここでは、「余」が京都の夜の寒さについて語っている箇所(①⑥⑩⑫)と、寒さに対する「余」のやや過剰ともいえる反応(①⑥⑩⑫以外)について、『夜の京阪』に見

られる言説や同時代の状況と照らし合わせながら検討を加える。以下に該当箇所を引用する。

- ① 「東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた」
- ② 「顫へて居る余の車は長き轡を長く連ねて、…」
- ③ 「余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける」
- ④ 「(人力車で) 馳ける程顫へねばならぬ」
- ⑤ 「膝掛をとられて顫へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふであらう」
- ⑥ 「寒い町を通り抜けて、よく／＼寒い所へ来たのである」
- ⑦ 「顫へながら(家に) 飛び込んだ客は寒がりである」
- ⑧ 「主人と居士は余が顫へてゐるのを見兼ねて、「公、まづ(湯に) 這入れ」と云ふ」
- ⑨ 「加茂の水の透き徹るなかに全身を浸けたときは菌の根が合はぬ位であつた」
- ⑩ 「湯に入つて顫へたものは古往今来沢山あるまいと思ふ」
- ⑪ 「肩のあたりへ糺の森の風がひやり／＼と吹いてくる」
- ⑫ 「車に寒く、湯に寒く、果は布団に迄寒かつたのは心得ぬ」
- ⑬ 「京都はよく／＼人を寒がらせる所だと思ふ」
- ⑭ 「太織の夜具のなかなる余は愈寒かつた」
- ⑮ 「顫へつゝ窓を開ければ…」
- ⑯ 「余は幾重ともなく寒いものに取り囲まれてゐた」

「寒い」という語が用いられているものに加えて、「顫へ」るや「ひやり」など、「寒さ」に通じる表現を含むものも抜き出してみた。「淋しさ」と同様、あるいはそれ以上に「寒さ」が繰り返されていることが分かる。引用の①⑥⑩⑬では、京都という場所(空間)の「寒さ」について語られている。なかでも①に注目したい。十五年ぶりに七条停車場に降り立つた「余」は、「東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた」と、京都を東京よりも寒い場所として語っている。この部分について、佐藤良太氏は当時の気象データを調査し、明治四十年三月二十八日午前八時の東京は5.2℃、同日午後六時の京都は5.0℃と差がないことから、右の描写は京都の「寒さ」を「強調」するための意識的な「改変」であると指摘している⁶²⁾。

しかし、実際に漱石が京都に到着したのは午後七時三十七分で、そこからさらに北へ約六キロの道のりを人力車で移動している。目的地である下鴨・糺の森の狩野亭吉宅に到着したのは午後九時前後と推定される。佐藤氏が示した資料によれば、午後十時の京都はマイナス0.19℃、気象庁のホームページ⁶³⁾で公開されている統計では、当日の最低気温はマイナス2.1℃(東京の最低気温は3.0℃)となつていことから、このあと一気に気温が下つていったことが分かる。そうしたなかを人力車で走つていくことを考えれば、移動中の体感温度はかなり低かつたはずである。

さらに、別の角度から考えてみる。漱石の明治四十年三月二十八日の日記には、「京都の first impression 寒イ」という記述

のほかに、「暁二鳥ガ鳴ク。への字ニ鳴きくの字ニ鳴く」、「夜中に時計ガチ——ンと鳴る」といった、夜中や明け方の出来事が記されている。ここから、日付は「二十八日」ではあるが、実際に日記を書いたのは二十九日と推測される。だとすれば、漱石の京都に対する「寒い」という印象には、七条停車場に降り立つてから人力車で下鴨・糺の森に至り、狩野亭吉宅に投宿した一日を通しての「寒さ」が内包されているのではなからうか。そうした印象ないし実感が①の描写につながったとすれば、京都は東京よりも「寒い所」になるし、「強調」のための意識的な「改変」とは必ずしも言えないだろう。

さらに、『夜の京阪』を見ると、『京都は寒い所』といひますけれども（歌川国松「京の雪の夜」のように、京都と「寒さ」が結びつけられて語られている。「京に着ける夕」と時期が近い「寂しき夜の市街」にも、次のような描写が見られる。

年頃の娘二人、手を曳合ふてか、肩と肩とを摺合して歩みながら、／『おゝ寒む、なんで恁麼に寒いものやろ』／『大概奈良の水取りとかいふのやろ』／『ほゝゝゝお虎はんのお箱が初まつた、お婆アはん見たいに、直ぐお説教やわ』／一人の娘は稍腹立たしきといふ声にて、／『爾やかて、奈良の水取り頃は寒いもんやと阿母アはん聞いてましたわ』／『ほゝゝ好かん、妾は爾ういふ事いふの大嫌い』

「奈良の（お）水取り」とは、東大寺二月堂で、陰曆二月一

日から十四日まで行われる修二会のことである。二月十二日には、深夜から未明にかけて堂前にある若狭井の水を汲んで香水にする儀式があり（現在は三月十二日に行われる）、関西では春の到来を告げる年中行事である⁶⁵。「寂しき夜の市街」で描かれているのが旧曆二月十二日とすると、新曆では三月十日になる。この描写からも、「余」が訪れた時期の京都の夜は「寒い」ことが分かる。同じく「寂しき夜の市街」のなかで「予」が、

頃は春のはじめ、祇園の夜桜も最うほころび初めやうかと思はるゝ此頃の陽気なれど、四面山もて囲まれたる京は夜に入り遽に肌寒く、颯と吹下す一陣の叡山風は、『おゝ寒い』と思はずも予を眩かせぬ

と語っていることから、引用の①をはじめ、⑥⑩⑬の描写はいずれも、同時代の京都の夜の寒さを反映しているといえる。

そのうえで、寒さに対する「余」のやや過剰ともいえる反応を描くことに、どのような意味があるのか。京都に暮らす人々や、日常的に京都の夜に触れている人々には、京都の夜の寒さは日常である。そうした読者にとって、「烈しい」「刺激の強い」「熱気」ある東京から来た「余」が、「東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた」と語り、人力車でも、湯ぶねでも、布団でも「顫」えている姿は諧謔的なものに映ったろう。漱石がそうした「余」の姿を描いたのは、新聞小説家として読者の存在を意識していたのかもしれない⁶⁵。

三、「ぜんざい」と京都

前章では、「京に着ける夕」の「淋しさ」と「寒さ」の描写に、同時代の夜の風景が反映されていることを確認した。本章では、「ぜんざい」の描写について同様に検討を加える。

「ぜんざい」の描写は、「余」が人力車から見た街の風景のなかに登場する（二章で引用）。しかし、それだけではない。子規との思い出も絡み合い、「赤いぜんざいと京都とは到底離されない」ほど「余」の記憶に定着している。

始めて京都に来たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の終屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提灯である。此の大提灯を見て、余は何故か是が京都だなと感じたぎり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が当時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。実はぜんざいの何物たるかをさへ弁へぬ。汁粉であるか煮小豆であるか眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稲妻の迅かなる閃きのうちに思ひ出す。

丹治伊津子氏は、漱石と子規の交友が落語を介して始まった

ことや、京都が落語の発祥地であることを踏まえて、「京に着ける夕」を落語の視点から分析している。氏によれば、「ぜんざいは京都で、京都はぜんざいである」という件は、三遊亭円朝「士族の商法（御膳汁粉）や桂文三「改良ぜんざい」に通じ、「赤い提灯」は文三が乗り回していた「真っ赤に塗つた人力車」のイメージにつながるという⁹⁰。さらに、水川隆夫氏は丹治論を補足して、人力車の「かんからゝん、かんからゝん」の音と赤い提灯は、「怪談牡丹灯籠」の「カランコロン〜」と鳴る駒下駄の音と、お露が持つている「牡丹の花の燈籠」に通じると指摘している⁹¹。このように、「ぜんざい」の描写はプレテクトストとの影響関係がすでに検討されている。

それでは、この「ぜんざい」の描写にはどこまで同時代の風景が反映されているのであろうか。この点について丹治氏は、氏が問い合わせた「菓子資料室 虎屋文庫」の「江戸期にもぜんざいの記載はみつかりません」という回答や、菓子司「末富」当主山口富蔵氏の「昔からぜんざい屋というのはあまり聞きませんね」という発言を踏まえて、「軒に提灯を掲げたぜんざい屋が連なるという設定は京都では無理がある」ため、「漱石の創作としか考えられない」と結論づけている⁹²。

確かに、「軒に提灯を掲げたぜんざい屋が連なるという設定」は「京に着ける夕」の創作的側面だといえる。しかし一方で、「余」が京都にほとんど見られない「ぜんざい屋」を持ち出し、「ぜんざいは京都で、京都はぜんざい」と語っているとしたら、それはいささか不自然である。漱石と子規が汁粉好きであるこ

とが意識されているにしても⁽³⁾、この「ぜんざいと京都」という組み合わせは、同時代の読者にとつても了解事項だったのでなからうか。

『夜の京阪』では、「ぜんざい屋」は納涼床の際に出店されるものとして言及されたり⁽⁴⁾、新京極にある様々な商店の一つとして紹介されている⁽⁵⁾。なかでも「京都の飲食店」(変通子)では、関西の「ぜんざい」が東京の「しるこ」であることや、実際に店で出される「ぜんざい」の特徴を話柄にしなから、「ぜんざい屋」が紹介されている。

ぜんざい屋を御紹介申し上げやう、これは東京のしるこやである、御承知の通り、関西では東京で所謂しるこの事をぜんざいといふのである、東京で善哉といへば、例の粟か道明寺の蒸したのにどろ／＼した濃い餡をぶツかけたのをいふのであるが、関西ではさうではない、一般に東京のしるこをぜんざいといふので、尤もなかには、『東京御しるこ』などと書いたものもあるが、別に変ツたものを喰はせるでもない、ツマリ警察威しに過ぎないのである。出来るものはといふとまづ東京でいふ御膳しるこ、即ち普通のしるこ餅で、家々によつて家号なぞに因みある名をつけて、それを其家の特産物として居る、その他紅餡、白餡、茶入、小倉、潰し餡、いろ／＼とあつて、何んでもお好みに応ずるのであるが、闇の梅とか宇治の里、朧月とか初日の出とか乃至翁とか何んとか角とかいふ名称に至つては、ヤハリ

家々によつて随意な名を命じてある。味はといふと概して甘きに過ぐる方で、上方一流の悪しツこい傾むきがある、そして実も白玉よりは餅の方を喜ぶ客が多いやうである、それから妙なことには、東京のやうに香物を添へて出さぬ、或人に問ふたらば、これは畢竟経済上から考へたもので、折角甘いものを喰べたあとで、塩ツぱいものを喰ては先の甘いのを打破してう理であるからであらうとの説明であつた

また、時期はさかのぼるが、『京都と奈良』(『文芸倶楽部』定期増刊第八巻第六号、明治三十五年四月)でも、新京極の「善哉餅屋」が紹介されている(齋藤紫軒「新京極」)。

◎善哉餅屋 錦魚亭、道場、大松亭、錦魚亭は座敷があつて夏は水もする、善哉二銭小倉善哉三銭汁粉金時四銭萩の餅一個一銭すまし五銭、書生などが多く行く処で一寸泔皮の剥けた下婢が置いてある。道場、大松亭は少し安いので、饅頭屋と同じく腰かけの追込みである、善哉ぞうに二銭、小倉汁粉三銭金時も三銭で持て来るのは小僧や小女郎。

これらの記述から、京都に「ぜんざい屋」なるものが一定数存在していたことが分かる。

では、どこに、どのくらい数があつたのか。『京都商工人名録』(明治三十八年版、明治四十五年改正版)から抜き出してみる。

以下、上から商号／住所／業種（営業税法の業別）の順に記す。

- ・近与／寺町五条角／餅（販売）⁽³²⁾
- ・永徳堂／三条寺町東／善哉（販売）
- ・常盤／寺町三条北／善哉（販売）
- ・亀山／松原油小路西／善哉（雑業）
- ・ぜんざい亭／新京極四条北／善哉（雑業）
- ・錦魚亭／新京極三条南／善哉（雑業）
- ・旭亭／御旗町／善哉（雑業之部）
（明治三十八年版）
- ・近与／寺町五条角／餅
- ・亀山／松原油小路西／善哉
- ・道場／新京極四条上／善哉 ※ぜんざい亭のこと。氷水を兼業
- ・明ほの／大和大路四条上二丁目／善哉 ※三十八年も営業
- ・常盤／寺町三条上／善哉
- ・記載なし／河原町蛸薬師下／善哉 ※営業者は山本光太郎
- ・錦魚亭／新京極三条南／善哉
- ・旭亭／四条寺町東／善哉 ※氷を兼業
- ・山大／大宮上立売上／水（販売）※蝟燭、ぜんざい、洋反物を兼業
（明治四十五年改正版）

ここから、少なくとも明治三十八年では八軒（明ほのを含む）、四十五年では九軒の「ぜんざい屋」が存在していたことが確認できる。継続して営業している店は、明治四十年も同じ場所に

あったとみてよからう。ただし、『京都商工人名録』の記載対象が原則として営業税十円以上の納税者であることや（凡例）、他業種や兼業などでぜんざいを製造、販売していた店がある可能性を考えると、実際の数はさらに多かつたと思われる。所在地に着目すると、寺町や新京極などの中心部に多いことが分かる。漱石たちを乗せた人力車がこれらの場所を通つたかどうかは分からないが、明治四十年の京都に「ぜんざい屋」は確かに存在していたといえる。

一方、漱石が子規と一緒に京都を訪れた明治二十五年はどうであつたか。正確な数は不明だが、『（工部）都の魁』（石田有年編、明治十六年十月）の「ぜんざい商ノ部」に記載がある「錦魚亭」「明ほの」「近与」「柳錦亭」「旭亭」は、明治二十五年も営業していたと思われる。なかでも四条大橋東詰（川端通四条下ル、現「京都四條南座」の南隣）の「柳錦亭」は、前面が納涼床の最高入札額（二坪五十一銭）を記録する一等地にあつたため、⁽³³⁾ 京都の夜を見物に訪れた漱石と子規の目にとまり、印象的な風景として記憶に深く刻み込まれた可能性も考えられる。

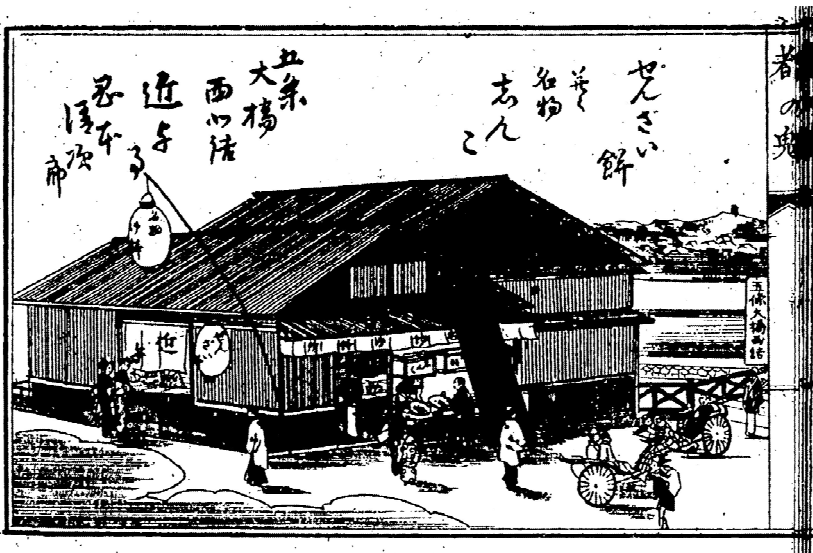
『都の魁』は様々な業種の有名店を絵入りで紹介している案内書（ガイドブック）であるため、当時の店の様子や街の景観をうかがい知ることができる。例えば、先の「柳錦亭」は、「ぜんざい」と書かれた掛行灯を店先に設置している（17頁【図3】参照）。また、五条大橋西詰の「近与」は、軒下に「ぜんざい」と書かれた提灯を下げている（17頁【図4】参照）。明治二十五年の漱石たちが見ていたのはこうした風景ではなかつたろうか。



【図3】石田有年編『都の魁』（明治16年10月）
「柳錦亭」（川端通四条下ル）の様子

そして明治四十年の読者も、「ぜんざい屋」のある風景が日常だったとすれば、時期は異なるが、【図3】や【図4】のような店の佇まいが記号化され、一種の〈原風景〉となつて記憶に定着されていたはずである。

そのように考えると、「余」が人力車から見た風景に「赤いぜんざいの大提灯」が登場し、「ぜんざいは京都で、京都はぜんざいである」と語る描写は、現実性をもつて同時代の読者に受容されたのではなからうか。「汁粉であるか煮小豆であるか」という、東西の食文化の差異に触れた一節があることを考え合わせると、「京に着ける夕」における「ぜんざい」の描写もまた、漱石が読者を意識したものだつたといえるかもしれない。



【図4】石田有年編『都の魁』（明治16年10月）
「近与」（五条大橋西詰）の様子

四、「京に着ける夕」と同時代の読者

二、三章では、「京に着ける夕」と同時代の言説・状況との比較から、「淋しさ」と「寒さ」、そして「ぜんざい」の描写に、京都の夜の風景が反映されていることを確認した。本章では、同時代の読者が「京に着ける夕」というテクストをどのような受容したのか（受容し得るのか）、掲載紙との関係から検討する。

「はじめに」でも述べたように、「京に着ける夕」は『大阪朝日新聞』発刊九千号の記念日に合わせて執筆、掲載された。明治四十年四月九日の朝刊第一面を見ると、一段目に数字の「9006」「太陽（朝日）を意識していると思われる」を織り込んだアール・ヌーヴ調の挿絵が描かれ、二段目から四段目にかけて社説「九千号」が続き、途中「電報」記事などを挟んで、五段目から七段目にかけて漱石の「京に着ける夕（上）」が掲載されている（21頁〔図5〕参照）。社説では、明治維新以来の日本の近代化が賛美されるとともに、新聞ないし新聞業の使命について論じられている。以下に日本の近代化賛美に関わる箇所を一部引用してみる。

維新以来茲に四十年、椎髻は断髪と為り、社袴はフロックコートと為り、寺小屋は小中大学専門諸校と為り、六鎮台は十六師団と為り、千石船は一万余頓の大汽船と為り一小島国は一等国の中に列して、其の進むや駸々乎たり、維新前後の事情に通ぜし人人にして今日の状況を観ば、恍とし

て別天地に生れし感あらん、亦一大進歩に非ずや

一方、「京に着ける夕」の冒頭は次のように始まる。

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貰いて、行くわれを七条のプラツ（ト）フォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をばつと吐いて、暗い国へ轟と去つた。／唯さへ京は淋しい所である。原に真葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至つても十条に至つても、皆昔の儘である。数へて百条に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。

漱石が「京に着ける夕」執筆時に社説の情報を得ていたかどうかは分からないが、両者は極めて対照的なテクストである。社説では、「文明開化」や「富国強兵」が想起される明治維新以来四十年の目まぐるしい発展を、挿絵の太陽で照らすように「一大進歩」として賛えている。「進歩」の中心地は言うまでもなく東京である。さらに、『大阪朝日新聞』の発行地が関西であることを考えると、明治三十六年に第五回内国勸業博覧会が開催され、商業の地として発展を続ける大阪も、東京と並ぶ「進歩」の磁場として認識されていたであろう。「京に着ける夕」の表現を借りれば、「烈しい」「刺激の強い」場所である。

これに対して、「京に着ける夕」では、「昔の儘」変わらない「淋しい」「寒い」京都の風景が描かれている。確かに京都でも、明治二年に東京奠都（遷都）が行われて以降、琵琶湖疎水の開通（第一疎水・明治二十三年、第二疎水・明治四十五年）や、第四回内国勸業博覧会の開催（京都市岡崎公園、明治二十八年四〜七月）、日本最初の営業用路面電車の運行（京都電気鉄道、明治二十八年）など、様々な近代化事業が進められてきた。しかし、東京や大阪と同じレベルで「進歩」を標榜するまでには至っておらず、近代都市としての差は歴然としていた。その落差は、『夜の京阪』に見られる言説によつてすでに確認したとおりである。

このように、同時代の読者はテクストの外部にある言説や状況を横目に見ながら、「進歩」対「不変」という大きな文脈のなかで「京に着ける夕」を受容したのである。この「進歩」対「不変」の構図から想起されるのが、「京に着ける夕」の二ヶ月後に発表された漱石の「虞美人草」である。東京と京都の二つの場所が対比的に描かれていることから、「京に着ける夕」が着想に一定の影響を与えているとみてよからう。小説中、甲野と宗近が東京に向かう汽車の速さと京都の路面電車を比較して語る場面に、「進歩」対「不変」の二項対立が見られる。

「急行列車は気持ちがいゝ。これでなくつちや乗つた気がしない」／（中略）／「京都の電車とは大違だらう」／「京都の電車か？ あいつは降参だ。全然第十義以下だ。あれで運転して居るから不思議だ」／「乗る人があるか

らさ」／「乗る人があるからつて——余りだ。あれで布設したのは世界一ださうだ」／「さうでもないだらう。世界一にしちや幼稚過ぎる」／「所が布設したのが世界一なら、進歩しない事も世界一ださうだ」／「ハ、ハ、ハ、京都には調和してゐる」（「虞美人草」七の三・第三十三回）⁽³⁴⁾

ここには、「東京」出身の甲野と宗近が「京都」を語るという、一種のオリエンタリズム的なまなざしが作用している。同時代の大阪の読者にも、こうしたまなざしが醸成されていたとすれば、社説と「京に着ける夕」の「進歩」対「不変」の構図は、そのまま「大阪」対「京都」のそれにスライドされるであろう。その場合、「京に着ける夕」というテクストは、「進歩しない」京都を描いていると読まれる可能性があるのではないか。

一方、京都の読者から見るとどうであろうか。明治三十六年ではあるが、『夜の京阪』の言説を手がかりにしてみる。

同じ三府の中でも大阪といへば、会社や工場の煙突から四六時中濃厚な煤煙を吐だして満都の空気を濁らし、その空気を呼吸する幾万の精霊の肺を不健全ならしむる恐ろしさ
と、（中略）どの街もこの町も人ごみで道を歩いて居つても一刻も暢々しない雑踏とを連想するのであるが、京都となると流石に山紫水明を以て関左に鳴るだけに、道幅も広く、空気が清潔で、市街も極目抜き場所を除いては雑踏もせぬ、何となく余裕のあるやうに見える。（「本山まゐりの夜」）

ここでは、大阪が殺風景で没個性化された商業都市であるのに対し、京都は「昔の儘」の自然をとどめた風光明媚な場所として捉えられている。こうした視点に立つと、「京に着ける夕」の「淋しさ」や「寒さ」の描写は、大阪の読者から見た場合とは異なり、むしろ守るべきものをしぶとく守る古都の誇りとして、肯定的に読まれ得るのではないか。

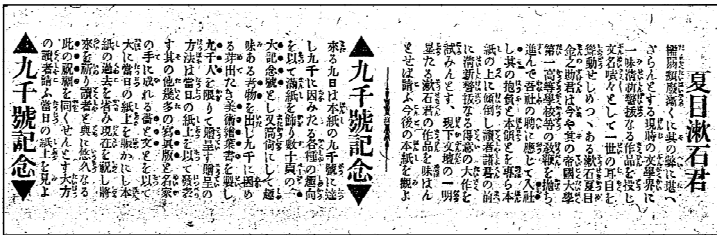
無論、読者の位相は単純に大阪と京都に二分できるものではないが、掲載紙の言説が居住地の異なる読者に与える印象に差異が生じる可能性も否定できない。とすれば、「京に着ける夕」にも多様な〈読み〉の可能性が浮かび上がってくるだろう。

おわりに

本稿では、「京に着ける夕」における京都の〈夜〉の「淋しさ」と「寒さ」、そして「ぜんざい」の描写について、同時代の言説や状況との相関、読者による受容といった観点から考察してきた。ほかにも、連載形式を意識した作品構成をはじめ、「入社辞」にも見られる「新聞屋」という呼称の使用や、新聞という公共性の高い媒体で「余」（漱石）と子規の個人的な思い出が語られていることの意味など、検討すべき問題は残っている。作品の構成意識については、漱石を創作の世界に導き、散文と韻文両方の「師」でもあった子規との関係を見る必要がある³⁵⁾。また、「新聞屋」という呼称についても、漱石に先立つて新聞人になった子規の営為を踏まえて、使用意図を考える必要

要がある。これらの問題については、別稿で改めて検討したい。

【図版】（本文中に掲載されていないもの）



【図1】明治40年4月3日『大阪朝日新聞』朝刊第1面（7段目）

「九千号記念」の告知と横並びで、漱石の朝日新聞社入社が紹介されている。

【注記】

- 1 漱石は、明治四十年三月十五日に自宅で東京朝日新聞社主筆池辺三山と面会し、入社を決意した（正式決定は三月二十九日）。『東京朝日新聞』では、四月一、二日の朝刊に掲載された「社告」で周知され、二日には「新入社は夏目漱石君」と名前入りで紹介された。
 - 2 『東京朝日新聞』明治四十年五月三日。『大阪朝日新聞』には「嬉しき義務」の題で、五月四、五日に上・下二回に分けて掲載された。
 - 3 『東京朝日新聞』明治四十年五月四日～六月四日。『大阪朝日新聞』明治四十年五月九日～六月四日。全二十七回。
 - 4 『東京朝日新聞』明治四十年六月二十三日～十月二十九日。『大阪朝日新聞』明治四十年六月二十三日～十月二十八日。全一二七回。
 - 5 『大阪朝日新聞』に掲載後、単行本には収録されなかった。
 - 6 菊池昌治氏も同時代の言説や状況に触れているが（『京都文学巡礼』三一書房、一九九〇年九月）、テキストレベルでの比較は行っていない。
- なお、本論とは直接関係しない先行研究についてもここで言及しておく。岡三郎氏は「京に着ける夕」を漱石の実体験に基づく紀行文と捉え、氏が所蔵する自筆原稿をもとに表現レヴェルで精緻に分析している（『夏目漱石研究 第三巻「虞美人草」と「京に着ける夕」の研究』国文社、一九九五年十月）。佐々木英昭氏は、「一夜」「京に着ける夕」「永日小品」が、「催眠術を含む心理学の知識や連句・俳句の経験をもとに漱石自身が独自に構成した「暗示」理論を背景にもつ、きわめて意識的な方法に基づいて」としている。そのうえで、「京に着ける夕」では、「京都を稲妻の迅かなる閃きのうちに思」い出す「ぜんざい」の赤提灯と、「肉体」と「心」を通り抜けていくような置時計の「チーン」と鳴る音が、「暗示」

を生み出す刺激になっていると指摘している（「暗示」実験としての漱石短篇——「一夜」「京に着ける夕」「永日小品」の深層——、『日本近代文学』第七十六集、二〇〇七年五月）。

7 平岡敏夫「夏目漱石 人と作品——『明治四十三年京都』からの接近——」

『国文学 解釈と鑑賞』第六十巻四号、一九九五年四月

8 平岡氏が参照した日記の記述は、次のとおりである。

今日は朝早くから仕事についていたが、呉服屋が来たので半日遊んだ。

今日はいよいよ、真下先生が学校の方へおこしになる様になったので、

暮早く播清で観迎会がある。七時に主人御出なすつた。十時すぎ、お

帰りなすた。丁度其時、甘糟様がいらつして、おとをりなすつて。ま

あ久しぶりで夜仕事して、一ぱいちりばりさがしてあるので、隠居で、

まあ。雨降りになった。何だか昨日からむしと〜あおつたかだとお

もへば。

9 佐藤良太「夏目漱石『京に着ける夕』論——〈近代以前〉への憧憬——」

『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三十七号、二〇〇九年三月

10 鳥居素川「漱石君を悼む」『大阪朝日新聞』大正五年十二月十一日

11 田中尚人、川崎雅史、亀山泰典「電気事業に着目した近代京都の街路景観デザイン」『景観・デザイン研究論文集』第一号、二〇〇六年十二月。

なお、『図2』（5頁）の引用も同論文による。

12 松田道雄「明治大正 京都追憶」平凡社、一九九五年十月。なお、「東丸

太町の仲小路」は、新京極から北東に一キロ強しか離れていない。

13 『夜の京阪』では下鴨神社が、「華表の中は則ち加茂御祖神社の神苑、杉

檜森然として立ち、地に些の寸埃もない、老翠古碧、蒼涼の気を吹いて、

人をして情を屏け、肅然として身の太古にあるを思はしむる。」「境内の

静かなること、実に太古の如く、神苑に鳥なくも喧しからず、神樹に風渡るも颯颯たらず」と描写されている(斎藤紫軒「糺の森の夏夜」)。

14 菊池昌治氏は、「緑の底に空を映さぬ暗い池」とは三方を東山、西山、北山に囲まれ、数万年前は湖の底であったという京都の風土をよく物語っている」としている(『京都文学巡礼』三二書房、一九九〇年九月)。

15 ジョン・アーリ、ヨナス・ラースン『観光のまなざし 増補改訂版』(加太宏邦訳、法政大学出版局、二〇一四年九月)。ジョン・アーリは、ミシェル・フーコーの「まなざし」を踏まえて、「観光のまなざし」もまた、「社会的に構成され制度化され」たものであると指摘している。

16 「心象地理」とは「なじみ深い『自分たち』の空間と、その自分たちの空間の彼方に広がるなじみのない『彼ら』の空間とを、心の中で名付け区別」することである(エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』上) 今沢紀子訳、平凡社、一九九三年六月)。なかでも他所の心象地理には、観光客などまなざす側の幻想(空想)や欲望が投影されている(Duncan, J. and Gregory, D. (1999). Introduction. In Duncan, J. and Gregory, D. (Eds.), *Writes of Passage: Reading travel writings*. London: Routledge.)。

17 水川隆夫『漱石と京都』平凡社、二〇〇一年五月

18 河野仁昭『京都の明治文学』白川書院、二〇〇七年一月。なお、河野氏と『定本 漱石全集』第十二巻の「注解(清水孝純氏執筆)」は、「長い橋の袂を左に切れて」の「長い橋」を「賀茂大橋」としているが、水川隆夫氏が指摘しているように、当時はまだ「賀茂大橋」がなかったため、正しくは「出町橋」である。

19 丹治伊津子氏は「川端通」に言及しているが(夏目漱石「京に着ける夕」論——寄席落語に始まった子規との交友——『京都語文』第二十号、

二〇一三年十一月)、「長い橋」を渡る描写と位置関係が合わないため、可能性は低いと考えられる。なお、サラ・フレデリック氏が「京に着ける夕」で描かれている場所をデジタル地図化する試みを行っており(北丸雄二訳『京に着ける夕』のデジタル地図——漱石と人文学のデジタル時代——『京都夏目漱石の會報 虞美人草』第二十号、二〇一七年三月)、何らかの言及がなされていると思われるが、管見には入っていない。

20 当時の通りの名称などについては、『京都明細全図』(明治三十六年)および『京都市街地図』(明治四十年四月)によって確認した。

21 このあと「予」は、丸太町通から寺町通へ曲がる手前で人力車を下り、徒歩で今出川まで向かう。この間、寺町通を走る「電車」や「夜鳴うどん屋」などが「物淋しい」風景の一コマとして描かれている。

22 佐藤良太「夏目漱石『京に着ける夕』論——〈近代以前〉への憧憬——」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三十七号、二〇〇九年三月

23 気象庁ホームページ「各種データ・資料」の「過去の気象データ検索」で、明治四十(一九〇七)年三月二十八日の気温を確認した(最終閲覧日：二〇一九年一月二十一日 https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/ctrn/view/daily_s1.php?prec_no=61&block_no=47759&year=1907&month=03&day=28&view=1)。

24 加藤友康ほか編『年中行事大事典』(吉川弘文館、二〇〇九年三月)参照

25 漱石の個人的事情に照らせば、十五年ぶりの京都で改めて子規の不在を確認したことからくる淋しさや、「子規の骨が腐りつゝある今日に至つて」、「教師を辞めて新聞屋にな」ることへの不安(生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は惨怛たるものに候) 明治四十年三月二十三日付、野上豊一郎宛書簡)があったと考えられる。この点に関して江藤淳氏は、

- 漱石の「寒い」気持ちには、狩野亨吉や菅虎雄のような「高等官の世界から滑り落ち」、「子規と同じ「新聞屋」になってしまったという想い」があると指摘している（『漱石とその時代 第四部』新潮社、一九九六年十月）。これに対して、「そのような意識が心をよぎることがあったとしても、それを「寒」い気持ちの主要な原因とみることはできない」と述べる水川隆夫氏の見解もある（『漱石と京都』平凡社、二〇〇一年五月）。
- 26 丹治伊津子「夏目漱石「京に着ける夕」論——寄席落語に始まった子規との交友——」『京都語文』第二十号、二〇一三年十一月
- 27 水川隆夫「丹治伊津子氏の「京に着ける夕」論を読む——落語との関係について——」『京都夏目漱石の會会報 虞美人草』第十三号、二〇一四年三月
- 28 丹治伊津子「夏目漱石「京に着ける夕」論——寄席落語に始まった子規との交友——」『京都語文』第二十号、二〇一三年十一月
- 29 子規は自身を「汁粉党」（『煩悶』明治三十五年頃）と称し、漱石は「満韓ところづく」（十三）（『東京朝日新聞』明治四十二年十一月十三日）に、汁粉を食へ過ぎて盲腸になったというエピソードを記している。
- 30 真下飛泉「四条積夕納涼」に、「床机の間の中洲には。氷屋は無論の事。うどん屋そばや善哉餅。菓子果物は申すには及ばず」と言及されている。
- 31 高橋愛川「点灯後の新京極」に、「家並奇麗に建て連なつた二丁町に芝居寄席をはじめとして、襪屋だの靴屋だの、紙屋に八百屋に袋物屋、菓子屋煙草屋善哉屋（中略）さてはいろいろ／＼種々の商店」があると紹介されている。
- 32 「近与」の業種は「餅」屋となっているが、『都の魁』（石田有年編、明治十六年十月）では「ぜんざい商ノ部」に紹介されており、ぜんざいを

提供していたことが明らかであるため、ここに含めた。

33 「鴨川床の入札」『日出新聞』明治二十四年六月二十六日

34 引用は『定本 漱石全集』第四卷（岩波書店、二〇一七年三月）によった。

35 二宮智之氏は、末尾の句に見られる「鶴」に、俳句の添削を通して子規と漱石の間に共有されていた「死と転生に関するイメージ」があるとしたうえで、「京に着ける夕」は亡友子規への思慕が凝縮された「創作」であり、「春寒の」の句にもそうした意味が込められていると指摘している（『夏目漱石「京に着ける夕」論——『鶴』の表現と正岡子規との関わりを中心に——』『日本近代文学』第七十二集、二〇〇五年五月）。

※「京に着ける夕」の引用は『定本 漱石全集』第十二卷（岩波書店、二〇一七年九月）に、日記及び断片の引用は『定本 漱石全集』第十九卷（岩

波書店、二〇一八年四月）に、書簡の引用は『定本 漱石全集』第二十三卷（岩波書店、一九九六年九月）にそれぞれよった。

※『大阪朝日新聞』記事の画像の引用（図1）及び（図5）は、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」によった。

※引用に際してルビ等は省略した。また、旧字体は通行の字体に改めた。※引用文中の傍線はすべて引用者による。また、「／＼」は改行を表している。

【付記】

本稿は、二〇一八年一月十九日に九州大学で開催された「近代文学と東アジア」研究会第六回合同研究会での口頭発表をもとにしている。当日、ご教示を賜った方々に記して感謝申し上げます。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年）